

松本市制80周年
記念キャンペーン

コミュニケーション



松本人の

両義性

東京外国語大学教授
(国際関係論・現代
中国学)・評論家

中嶋嶺雄

松本に生まれ育った私が誇りに思うのは、松本の人たちが文化的・知的風土に敏感なことである。そうした環境の中で、私自身幼時から鈴木鎮一先生(バイオリン)、や石井柏亭先生(絵画)、若山喜志子先生(歌人)のような偉大な個性に接することができたし、一志茂樹園長の松本幼稚園から岡田甫校長の松本深志高校に至るまで、この間、源

池小学校、清水中学校といっぺんも素晴らしい学校で大いに育(はぐくん)でいただいた。そうした風土の中で松本人は、日本の発展を政治や行政においてではなく、文化や教育において担うのだという自意識をもっている。

だが、このことは半面である種の排他性をもたらす、島国根性ならぬ・山根性となつて、人の足をひっぱったり、羨(せん)望(ぼう)や怨嗟(えんさ) (えんさ)の渦巻く人間関係の土壌にもなつていて、葦(あし)の髄(髄)から世界をのぞくことにもなりかねない。今、松本人に求められるのは、松本の良さをスポイルする軽薄な東京志向ではなく、二十一世紀に向けての開かれたローカリズムだといえよう。

松本人気賞を論ずる

松本の人には、理屈っぽく、人づき合いが下手だ、と思っっている。

「私のまつもと」シリーズを始めるにあたって行った市民八百人アンケートの中で、それぞれ一、二位を占めた答えなのだが、果たしてどうなのか。県内外で活躍する

松本市出身の方々から松本人論を寄せて頂いた。



私のまつもと-松本人の両義性

昭和
てから
次第に
松本へ
の心中
べて、
と、高
と、そ
とで
だ。偏
べきか
史実
本人は
一般的
取・外
うに甲
下初の